

● 詩篇 150

- 1 ハレルヤ。
神の聖所で、
神をほめたたえよ。
御力（みちから）の大空で、
神をほめたたえよ。
- 2 その大能のみわざのゆえに、
神をほめたたえよ。
そのすぐれた偉大さのゆえに、
神をほめたたえよ。
- 3 角笛を吹き鳴らして、
神をほめたたえよ。
十弦の琴と立琴をかなでて、
神をほめたたえよ。
- 4 タンバリンと踊りをもって、
神をほめたたえよ。
緒琴（おごと）と笛とで、
神をほめたたえよ。
- 5 音（ね）の高いシンバルで、
神をほめたたえよ。
鳴り響くシンバルで、
神をほめたたえよ。
- 6 息のあるものはみな、
主をほめたたえよ。
ハレルヤ。

※ 〈ハレルヤ〉とは、“主（ヤハ）をほめたたえよ”の意味で、日本語訳のしかたの問題。
ハレルヤ = 神をほめたたえよ = 主をほめたたえよ

旧約聖書の「詩篇」のみことばを、みなさんにプレゼントしたいと思います。

最初に語っておかなければならないことは、日本語で「詩篇」と訳されていることばについてです。

聖書を翻訳する時は、原典に忠実に翻訳してほしいと思うのですが、日本語訳の「詩篇」ということばは、原典とは無関係につけられたものです。原典に忠実な訳ではありません。

そのために、信仰に関する、詩を集めた、“詩集”であるかのように受けとめられてしまっています。

しかしこの書は、普通考えられているような“信仰詩集”ではなくて、〈賛美歌集〉です。

エルサレムの神殿での礼拝や、各地のシナゴークと言われる会堂の集まりにおいて用いるために、実際にうたわれてきた歌や、歌いつがれてきた歌を集めて編集された、5冊の賛美歌集であるのです。

ヘブル語聖書では、「テヒッリーム」と呼ばれます。これは、「ハッレール」（賛美する・ほめたたえる）という動詞を語源とする名詞の、複数形ですので、「賛美歌集」という意味なのです。主なる神を礼拝するために用いられる賛美歌集です。

現在、私たちが、礼拝で用いています「讚美歌」や「聖歌」などといった賛美歌集に近いものです。

ですから、「詩篇」と訳されている「テヒッリーム・賛美歌集」は、本来的には、読むものではなくて、歌うものです。歌われてきたものです。

曲は残ってはいませんが、曲が残っていないことは恵みであり、摂理であると思います。それぞれの国、それぞれの時代、個人のメロディで歌いつがれていくのです。

今日の個所、「詩篇 150篇」も、
「ハレルヤ。神の聖所で、神をほめたたえよ。」と朗読するというよりは、
♪「ハレルヤ。神の聖所で、神をほめたたえよ。」
という風に、メロディやリズムや和声をもった形で、主なる神にささげられたものだ理解しますと、これらのみことばに、もっともっと、深さや広さ、高さなどを感じることができるのではないかと思います。

この「テヒッリーム・賛美歌集」には、いろいろな信仰の歌が集められています。
神ご自身を賛美することは勿論ですが、創造のみわざをたたえたり、救いの恵みをメシヤ預言として歌ったり、神のさまざまな教えのすばらしさをたたえたりするなどの種々の内容を、神の民たちが、現実の生活の中で、喜びの時・悲しみの時・苦しみの時などに作ったり、歌ったりしたものです。

信仰生活の、あかしの歌の数々であると言えます。
ですから、この「テヒッリーム・賛美歌集」は、内容的には、信仰と生活の手本として、私たちに、神のみこころを示してくれる書であるのです。

聖書と賛美歌とは、私たちが信仰生活をすすめる上で、車の両輪のような働きをしています。聖書は主なる神から人への語りかけであり、賛美や祈りは、人から主なる神への語りかけです。
この両方が一つになって、私たちの信仰生活は祝福を受けて押し進められていくのです。丁度、車の両方の車輪が回転して、車が前進していくのと同じです。

●「詩篇」と訳されている「テヒッリーム・賛美歌集」の最初のページを、開いていただきましょう。
これが、「詩集」ではなくて「歌集」であるということについて、もう少し見ておきましょう。

各篇の数字の下に、“ことば書き”がありますが、それを見ていきたいと思います。

- 1篇・2篇には、何も記されていませんが、
- 3篇 ダビデがその子アブシャロムから、のがれたときの賛歌
 - 4篇 指揮者のために。弦楽器に合わせて。ダビデの賛歌
 - 5篇 指揮者のために。フルートに合わせて。ダビデの賛歌
 - 6篇 指揮者のために。八弦の立琴に合わせて。ダビデの賛歌
 - 7篇 ベニヤミン人クシュのことについて、ダビデが主に歌ったシガヨンの歌
 - 8篇 指揮者のために。ギテの調べに合わせて。ダビデの賛歌
 - 9篇 指揮者のために。「ムテ・ラベン」の調べに合わせて。ダビデの賛歌

10篇は記されていないくて

11篇 指揮者のために。ダビデによる

12篇 指揮者のために。八弦の立琴に合わせて。ダビデの賛歌

.....

こういう風に、ずっと続いていきます。

いくつか、特徴的なものを見ておきますと、

22篇 指揮者のために。「暁の雌鹿」の調べに合わせて。ダビデの賛歌

※「暁の雌鹿」（あかつきのめじか）という曲の名前が、出てきています。

56篇をお開き下さい。

56篇 指揮者のために。「遠くの人、もの言わぬ鳩」の調べに合わせて。
ダビデのミクタム。ペリシテ人が、ガテでダビデを捕らえたときに

57篇 指揮者のために。「滅ぼすな」の調べに合わせて。

ダビデのミクタム。ダビデがサウルからのがれて洞窟にいたときに

58篇 指揮者のために。「滅ぼすな」の調べに合わせて。ダビデのミクタム

59篇 指揮者のために。「滅ぼすな」の調べに合わせて。ダビデのミクタム
ダビデを殺そうと、サウルが人々を遣わし、彼らがその家の見張りを
したときに

60篇 指揮者のために。「さとしは、ゆりの花」の調べに合わせて。

教えのためのダビデのミクタム。ダビデがアラム・ナハラヤムや
アラム・ツォバと戦っていたとき、ヨアブが帰って来て、塩の谷で
エドムを一万二千人打ち殺したときに

「暁の雌鹿」「遠くの人、もの言わぬ鳩」「滅ぼすな」「さとしは、ゆりの花」

こういった曲の調べ・メロディに合わせて、とあります。これらの曲は、当時の人々が、曲名を
聞いただけでわかったほど、よく知られていたメロディだったと考えられます。

その他、「賛美歌集」であるということを示している“ことば書き”を挙げてみますと、
「ダビデの賛歌」のような形で、ダビデの名前が出てくるのが150篇中、73回。〔約半数です〕

「アサフの賛歌」という風に、アサフの名前が出てくるのが、12回。

「コラの子たちの賛歌」という風に、“コラの子たち”と出てくるのが、11回。

「指揮者のために」というのは、55回。〔約1/3〕

「賛歌」というのは、57回。意味はよくわかりませんが、「マスキール」というのが、13回。

「シガヨン」が、7回。「ミクタム」というのが、6回出てきます。

「ゆりの花」という曲名は、4回。「滅ぼすな」という曲名は、3回。

意味はよくわかりませんが、音楽用語だと思われます「セラ」ということばは、39篇中に71回も
出てきています。

以上のようなことから、ますます、この書が、「詩集」なのではなくて、「賛美歌集」なのだ
ということが、わかっていただけたと思います。

「デヒッリーム」 この賛美歌集には、150曲の賛美歌が収められていますが、実は、1冊の歌集で
はありません。5巻に分けられています。

〈第1巻〉は、1～41篇まで。第1巻に出てくる、神の呼び方はほとんどが「ヤハウエ」です。

この第1巻の最後、41篇の最後にご注目下さい。

13節 「ほむべきかな。イスラエルの神、主。とこしえから、とこしえまで。アーメン。アーメン。」

5巻とも、それぞれの巻は、主なる神に対する「頌栄」（しょうえい）をもって、終わっています。

この「頌栄」、主なる神をほめたたえることばは、「賛美歌集」全5巻のどの巻にもありまして、巻の終わりのしるしとして、編集者が付け加えたもののようです。勿論、靈感を受けてですが。

この〈第1巻〉には、41曲中、37曲にダビデの名前が出てきていまして、編集された段階で、「ダビデ歌集」なるものが存在していて、広く礼拝に用いられていたことを伺われます。

「ダビデ」と記されているものすべて・「ダビデ歌集」に収められているものすべてが、ダビデ自身の作であると考えすることは、必ずしも正しくはなさそうです。

ダビデ自身の作であるものが多いと思われそうですが、中身的に、「ダビデに献上された賛歌」とか、「ダビデについての賛歌」とか、「ダビデをしのぶの賛歌」と理解すべきものがありますから、ダビデの時代よりも、後に作られたものもありそうです。

ダビデ自身の作であるかどうかは、それぞれの歌の内容から、判断されなければなりません。

〈第2巻〉は、42～72篇までです。第2巻に出てくる、神の呼び方は、第1巻が「ヤハウエ」だったのに対して、第2巻は「エローヒーム」です。第1巻が編集されたのとは、時期が違っていることを示しています。

第2巻は、「ダビデ歌集」からも18曲とられています。別に存在していたと思われる「コラの子歌集」から、7曲とられていまして、「ダビデ歌集」「コラの子歌集」をもとに、編集されたもののようです。

第2巻の最後、72篇の最後を見ておきましょう。

18・19節 「ほむべきかな。神、主。ただ、主ひとり、奇（くす）しいわざを行う。とこしえに、ほむべきかな。その栄光の御名。その栄光は地に満ちわたれ。アーメン。アーメン。」

やはり、「頌栄」をもって、終わっています。

〈第3巻〉は、73～89篇までです。使われている神の名前は2巻と同様、「エローヒーム」です。

第3巻は、「アサフ歌集」が中心で、11曲。「コラの子歌集」から、4曲とられています。

第3巻は、全部で17曲しかありません。

第1巻が41曲。第2巻が31曲。第3巻と第4巻が17曲ずつ。最後の第5巻が一番多くて、44曲の賛美歌がおさめられています。

第3巻の最後の「頌栄」も、見ておきましょう。89篇の最後です。

52節 「ほむべきかな。主。とこしえまでも。アーメン。アーメン。」

〈第4巻〉は、90～106篇までの17曲です。

この巻の内、10曲には“ことば書き”がありません。特別な歌集をもとに編集されたものではなくて、礼拝で用いられていたいろいろな賛美歌を、まとめたもののようです。

第4巻の最後、106篇の最後の「頌栄」を、見ておきましょう。
48節 「ほむべきかな。イスラエルの神、主。とこしえから、とこしえまで。
すべての民が、『アーメン』と言え。 ハレルヤ。」

そして〈第5巻〉は、107～150篇までの44曲で、全5巻の中で、一番多くの曲を収めています。
「ダビデ歌集」から11曲。「都上りの歌（うた）集」から15曲。「ハレルヤ歌集」から11曲が、収められています。

第4巻と第5巻で使われている神の名は、2巻・3巻が「エローヒーム」だったのに対して、「ヤハウェ」が多く、「エローヒーム」はわずかです。
2巻・3巻と、4巻・5巻の間にも、時の流れがあったことを示しているようです。

そして、第5巻の最後が、第150篇なのですが、各巻の終わりに置かれていた「頌栄」に相当するものが、一曲の賛美歌に拡大されて、全5巻の「賛美歌集」全体の結びとされています。

もともと、いくつかに分かれて存在していた歌集、「ダビデ歌集」「アサフ歌集」「コラの子歌集」「都上りの歌（うた）集」「ハレルヤ歌集」などから集められた賛美歌を、いろいろな時期に、いろいろな状況のもとで、編集されて、礼拝用の賛美歌集が作られていきました。

そして、最終的に、現在のような形の、全5巻・150曲にまとめられていった時に、前にも述べましたように、各巻の最後に「頌栄」が付け加えられましたし、この150篇も、一篇全体を「頌栄」にして、作曲されたものであらうと思われます。

さて、この「150篇」 150篇だけでなく、ここに収められている150曲の、すべての賛美歌は、どのように歌われたものなのでしょうか。

現在のような「楽譜」なるものが、まだなかったようですので、曲がどのようなものであったのかは、わかっていません。

しかし、メロディそのものはわかりませんが、賛美がささげられた雰囲気は、聖書のあちこちに記されています。

ソロモン王が、主の宮のためになした、すべての工事が完成して、主の契約の箱を神殿の至聖所（しせいじょ）に運び入れた時のことですが、
「歌うたいであるレビ人全員、すなわち、アサフも、ヘマンも、エドトンも、彼らの子らも、彼らの兄弟たちも、白亜麻布を身にまとい、シンバル、十弦の琴および立琴を手にして、祭壇の東側に立ち、120人の祭司たちも彼らとともにいて、ラッパを吹き鳴らしていた。」

ダビデ王によって立てられた〈歌うたい〉であるレビ人たちがいました。
アサフ、ヘマン、エドトンといった人たちや、彼らの子どもたちや同族の人たちです。
彼らは、主にささげる歌の訓練を受けた人たちで、「彼らはみな、達人であった。」と記されています。その人数は、288人いました。
白い服を、ユニフォームのようにして、着ていました。

歌だけでなく、楽器が用いられていました。
シンバル、十弦の琴、および立琴。そして、120人の祭司たちによるラッパが、吹き鳴らされました。

まずは、120のラッパが、壮大に吹き鳴らされます。 パッパパー パッパカパッパパー
そして、歌うたいたちが加わって、まるでひとりでもあるかのように、一致して歌声を響かせ、
主を賛美し、ほめたたえたのです。 ハーレルーヤー ハレルヤー

そして、シンバルと、さまざまな楽器が加わっていきます。

(シンバル) ジャジャジャジャー
(十弦の琴) ポロポロポロポロ ポロロ〜ン
(立琴) ポロ〜ン ポロ〜ン ポロロ〜ン

歌うたいたちの賛美が、主に向かってささげられます。

「主はまことに、いつくしみ深い。その恵みはとこしえまで。」

主はまことに 主はまことに 主はまことに いつくしみ深い
その恵みは その恵みは その恵みは とこしえまで

そのとき、主の宮は、雲で満ちました。

祭司たちは、その雲にさえぎられ、そこに立って仕えることができませんでした。主の栄光が、
神の宮に満ちたからです。

賛美すればするほど、主なる神の臨在感が人々に著しく、主の栄光が、神の宮に満ち満ちました。

聖書に記されている「聖書的な賛美」といいますのは、私たちが考えている以上に、もっともつ
と壮大で、喜びにあふれ、楽器も多く用いて、ささげうる最善のものをささげるという思いで、賛
美がささげられていたようです。

以上は、ソロモン王の時のものですが、「テヒッリーム・賛美歌集」に、一番多く名前が出てき
ますダビデ王の頃は、どうだったのでしょうか。

ダビデの時代には、まだ、エルサレムの神殿はありませんでしたが、〈神の箱〉をダビデの町・
シオンに運び上った時の、賛美のようすを見てみましょう。

ダビデは、レビ人の中から、十弦の琴・立琴・シンバルなどの楽器を使う〈歌うたい〉を任命し、
喜びの声をあげて歌うように命じました。

ヘマン・アサフ・エタンといった人たちで、彼らは、青銅のシンバルを用いて歌いました。

シンバルを用いて歌うのですから、現在の多くの歌い手たちが素手で、手に何ももたないで歌う
ようではなく、シンバルを演奏しながら歌ったわけです。

他の歌うたいたちは、十弦の琴を用いて、また他の歌うたいたちは、八弦の立琴を用いて賛美し
ました。

ダビデと全イスラエルは、歌を歌い、立琴、十弦の琴、タンバリン、シンバル、ラッパを鳴らし
て、神の前で、力の限り、喜び踊りました。

主にささげる歌の訓練を受けた歌うたいの達人たち・ヘマンやアサフやエタンといった、300人近
いレビ人たち。彼らは手に手に、立琴や十弦の琴やタンバリンやシンバルやラッパを持って、賛美
の歌声を響かせながら、主の契約の箱を、運び上っていったのでした。

それだけでは、ありません。

歌を歌い、楽器をかなでて、神の前で、力の限り喜び踊った、とあります。

どうでしょうか。現在の教会で、タンバリンやシンバル、ラッパを鳴らし、喜び踊りながら賛美
をささげ、礼拝をささげたとしたら、どんな反応が返ってくるのでしょうか。

「何と、非聖書的な!」ということに、なるかもしれません。最も「聖書的な賛美」が、最も非聖

書的と思われてしまっは大変です。

「サウルの娘ミカルは、窓から見おろし、ダビデ王がとびはねて、喜び踊っているのを見て、心の中で彼をさげすんだ。」とあります。

ネヘミヤの時代に、くずされていたエルサレムの町を再建した時の、城壁の奉献式のときには、ネヘミヤは、二つの大きな聖歌隊を編成しています。

第1聖歌隊は、城壁の東の方の位置につきます。

第2聖歌隊は、城壁の、反対の方の位置につきます。

祭司たちは、ラッパをもって、位置につきます。

そして、歌うたいたちは、イゼラフヤという人の指揮で賛美をささげます。

「彼らはその日、数多くのいけにえをささげて、喜び歌った。女も子どもも喜び歌ったので、エルサレムの喜びの声は、はるか遠くまで聞こえた。」

聖歌隊に合わせて、会衆もいっしょになって、喜びの賛美をささげているようすが、伝わってきます。

さて、「詩篇150篇」にもどって、150篇の賛美がどのように歌われたのか、考えてみましょう。

歌い方としては、4つの方法が考えられると思います。

①つめは、独唱する、という方法です。

②つめは、先にうたう“先唱者”といわれる独唱者と聖歌隊、あるいは、先唱者と会衆とが、交互に歌う、という方法です。

③つめは、聖歌隊が2組に分かれて、歌い交わすという方法です。

④つめは、聖歌隊、あるいは、聖歌隊と会衆が、斉唱するという方法です。

どの方法であっても、楽器が重要な働きをしていることは、これまで述べてきた通りです。

「150篇」を朗読するだけだと、1分10秒ぐらいで終わりです。

ハインリッヒ・シュッツという教会音楽家が、「テヒツリーム」の20曲近くの賛美に作曲しています、CDも発売されていますが、その演奏時間をみてみますと、「150篇」は7分20秒ほどです。朗読するだけだと1分10秒、賛美としてささげると7分20秒かかっています。

皆さんがよくご存じの、「ハレルヤコーラス」（ヘンデル・作曲）を例にしてみますと、歌われていることばを、言ってみましたら、

ハレルヤ。全能の主、おさめたまわん。

世のくにたみ、いまや、われらの主に帰するに及べり。

とわに、主、おさめたまわん。

主の主。王の王。ハレルヤ。

朗読すれば、21秒。

演奏されたレコードの時間を計ってみますと、4分7秒でした。

(ソプラノ)

ハレルヤ

ハレルヤ

ハレルヤ

ハレルヤ

ハレルヤ
 ハレルヤ ハレルヤ ハレルヤ ハレルヤ ハレルヤ
 全能の主 おさめたまわん
 ハレルヤ ハレルヤ ハレルヤ ハレルヤ
 ハレルヤ ハレルヤ ハレルヤ ハレルヤ
 全能の主 おさめたまわん
 ハレルヤ ハレルヤ ハレルヤ ハレルヤ ハレルヤ ハレルヤ ハレルヤ
 ハレルヤ ハレルヤ ハレルヤ ハレルヤ ハレルヤ ハレルヤ
 世のくにたみ いまや われらの主に帰するに及べり
 とわに 主 おさめたまわん
 主の主 王の王
 主の主 王の王
 主の主 王の王 王の王
 とわに主 とわに主 おさめたまわん
 とわに とわに
 ハレルヤ ハレルヤ
 とわに主 とわに おさめたまわん
 主の主 王の王 主の主 王の王
 とわに主 おさめたまわん
 主の主 王の王
 ハレルヤ ハレルヤ ハレルヤ ハレルヤ
 ハレルヤ

賛美の歌としてささげられますと、以上のような形でささげられるわけです。

今、言いましたのは、ソプラノのパートでしたが、これに、アルト・テナー・ベースの旋律が重なってきます。楽器の演奏も加わって、何度聴いても壮大で、感動的な、主なる神への「頌栄」となっています。

「150篇」の賛美も、「ハレルヤコーラス」のような大賛美・大頌栄であったと思われます。

主にささげる歌の訓練を受けた、歌うたいたち300人が、150人ずつの2つの聖歌隊に分かれて、主の宮の左右の位置につきます。

300人の中で更に分かれていまして、十弦の琴を手にしているグループ、立琴を手にしているグループ、タンバリンを手にしているグループ、緒琴を手にしているグループ、笛、音（ね）の高いシンバル、鳴り響くシンバルを手にしているグループがいます。

100人の祭司たちが、ラッパや角笛をもって、位置についています。

いよいよ、主をほめたたえる「大頌栄」のはじまりです。

指揮者の手が、振りおろされました。

壮大な、100人の祭司たちによる、ラッパが鳴り響きます。

パッパパパー パッパパパー パッパパパー パッパパパー パッパパパー

第1聖歌隊、第2聖歌隊が歌い出します。

左右から「ハレルヤ」の喜びの音が、響き合います。

ハレルヤ ハレルヤ ハレルヤ ハレルヤ ハレルヤ ハレルヤ ハレルヤ

すべての楽器が加わってきて、主の宮は、神をほめたたえる喜びにあふれます。

(シンバル) ジャジャジャジャー ジャジャジャジャー
(十弦の琴や立琴) ポロポロン ポロポロン ポロポロン
(笛) ピー ピー ピピピー ピー ピー ピピピー
ハレルヤー——— ハレルヤー——— ハレルヤー———

先唱者 「神の聖所で」 第1聖歌隊 「神をほめたたえよ」
第2聖歌隊 「神をほめたたえよ」
先唱者 「神の聖所で」 会衆と聖歌隊 「神の聖所で」
先唱者 「神をほめたたえよ」 会衆と聖歌隊 「神をほめたたえよ」
・ ・ ・ ・ ・
・ ・ ・ ・ ・

こんな感じで、ささげられていったのではないでしょうか。

「御力の大空で、神をほめたたえよ。」
神の力をみとめよ。威光は神の民の上に、御力は雲の上にある。
天は神の栄光を語り告げ、大空は御手（みて）のわざを告げ知らせる。

「その大能のみわざのゆえに、神をほめたたえよ。」
主の大能のわざと、主の王国の輝かしい栄光を、人の子らに知らせましょう。
あなたの王国は、永遠にわたる王国。あなたの統治は、代々限りなく続きます。

「そのすぐれた偉大さのゆえに、神をほめたたえよ。」
主は大いなる方。大いに賛美されるべき方。その偉大さを、測り知ることができません。
代（よ）は代へと、あなたのみわざをほめ歌い、あなたの大能のわざを告げ知らせるでしょう。
神、主よ。あなたの偉大さと、あなたの力強い御手とを、あなたは、このしもべに示し始められました。あなたのわざ、あなたの力あるわざのようなことのできる神が、天あるいは地にあるでしょうか。

「角笛を吹き鳴らして、神をほめたたえよ。」
祭司たちが、雄羊の角でできた角笛を、吹き鳴らします。
パパパパー パパパパー パパパパー パパパパー
パパパパー パパパパー パパパパー パパパパー

「十弦の琴と立琴をかなでて、神をほめたたえよ。」
十弦の琴と立琴を手に持った歌うたいたちが、演奏しながら歌います。
ポロロロロン ポロロロロン ポロロロロン ポロロロロ～ン
立琴をもって、主に感謝せよ。十弦の琴をもって、ほめ歌を歌え。喜びの叫びとともに、巧みに弦をかき鳴らせ。

「タンバリンと踊りをもって、神をほめたたえよ。」
踊りをもって、御名を賛美せよ。タンバリンと立琴をかなでて、主にほめ歌を歌え。

「緒琴（おごと）と笛とで、神をほめたたえよ。」
いろんな楽器が、順次加わっていった、賛美は更に喜びに満ちあふれていきます。

「音（ね）の高いシンバルで、神をほめたたえよ。」

ジャンジャジャジャーン ジャンジャジャジャーン ジャンジャジャジャーン

「鳴り響くシンバルで、神をほめたたえよ。」

ジャーーーーー

ジャジャジャジャジャ ジャーーーーー

「息のあるものはみな、主をほめたたえよ。」

天でも地でも、神によって創造された、生きとし生けるすべてのものは、全能で、偉大な神、主をほめたたえよ。命をもつ、すべての被造物は、主を、声のかぎり、多くの楽器を用いて賛美するという、このわざに加わるべきである。

「息のあるものはみな」 「主をほめたたえよ」 「主をほめたたえよ」

「息のあるものはみな」 「主をほめたたえよ」 「主をほめたたえよ」

ハレルヤ ハレルヤ ハレルヤ ハレルヤ ハレルヤ ハレルヤ ハレルヤ

ハレルヤ ハレルヤ ハレルヤ ハレルヤ ハレルヤ ハレルヤ ハレルヤ

ハーーーー レーーーー ルーーーー ヤーーーー

というのが、この「詩篇150篇」のみことばのようなのです。

さあ、私たちも、主に向かって、喜び歌いましょう。

われらの救いの岩に向かって、喜び叫びましょう。

感謝の歌をもって、御前（みまえ）に進み行き、賛美の歌をもって、主に喜び叫びましょう。

「すべての国々よ。主をほめたたえよ。

すべての民よ。主をほめ歌え。

その恵みは、私たちに大きく、

主のまことは、とこしえに。

ハレルヤ。」

ハレルヤ ハレルヤ ハレルヤ ハレルヤ ハレルヤ ハレルヤ ハレルヤ

ハレルヤ ハレルヤ ハレルヤ ハレルヤ ハレルヤ ハレルヤ ハレルヤ

ハーーーー レーーーー ルーーーー ヤーーーー

ハーーーー レーーーー ルーーーー ヤーーーー

● 【詩篇150篇】の私訳

1 ハレルヤ。

神の聖所で、 ハレルヤ。

御力の大空で、 ハレルヤ。

2 その大能のみわざのゆえに、 ハレルヤ。

そのすぐれた偉大さのゆえに、 ハレルヤ。

3 角笛を吹き鳴らして、 ハレルヤ。

十弦の琴と立琴をかなでて、 ハレルヤ。

4 タンバリンと踊りをもって、 ハレルヤ。

- | | | |
|---|---------------|-------|
| | 緒琴と笛とで、 | ハレルヤ。 |
| 5 | 音（ね）の高いシンバルで、 | ハレルヤ。 |
| | 鳴り響くシンバルで、 | ハレルヤ。 |
| 6 | 息のあるものはみな、 | ハレルヤ。 |
| | ハレルヤ。 | |